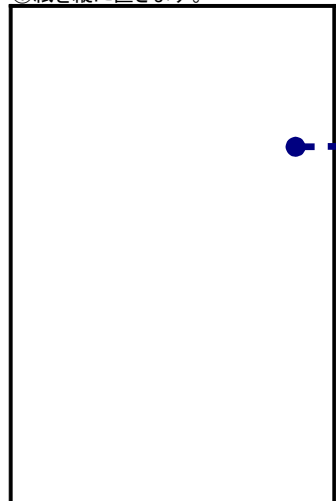
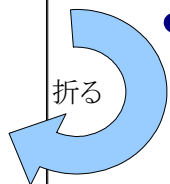
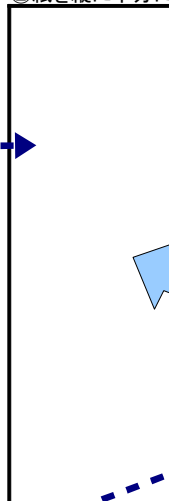


大きなサイズの紙垂(しで)の作り方

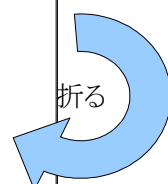
①紙を縦に置きます。



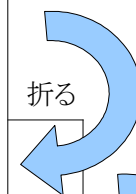
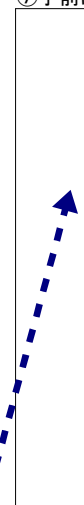
②紙を縦に半分に折ります。



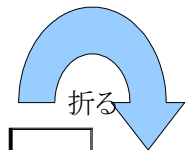
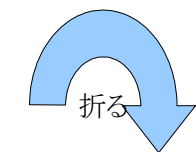
③さらに紙を縦に折ります。



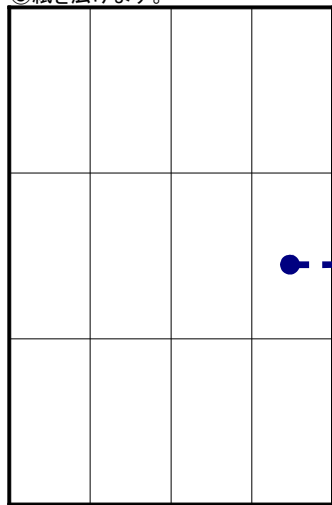
⑦手前に3回折れば完成です。



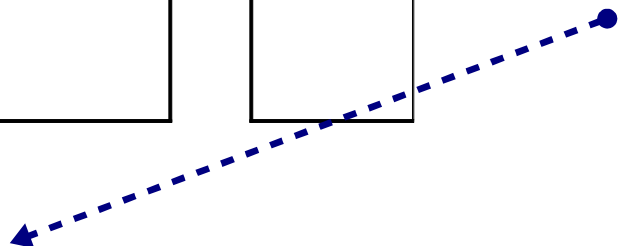
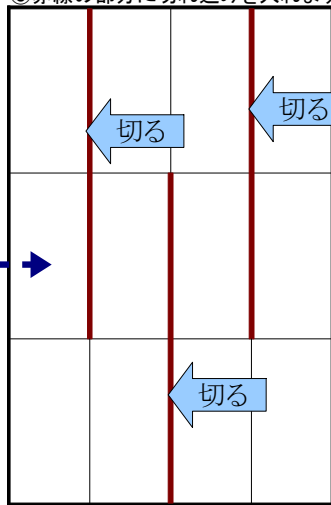
④紙を横に3分の1に折ります。



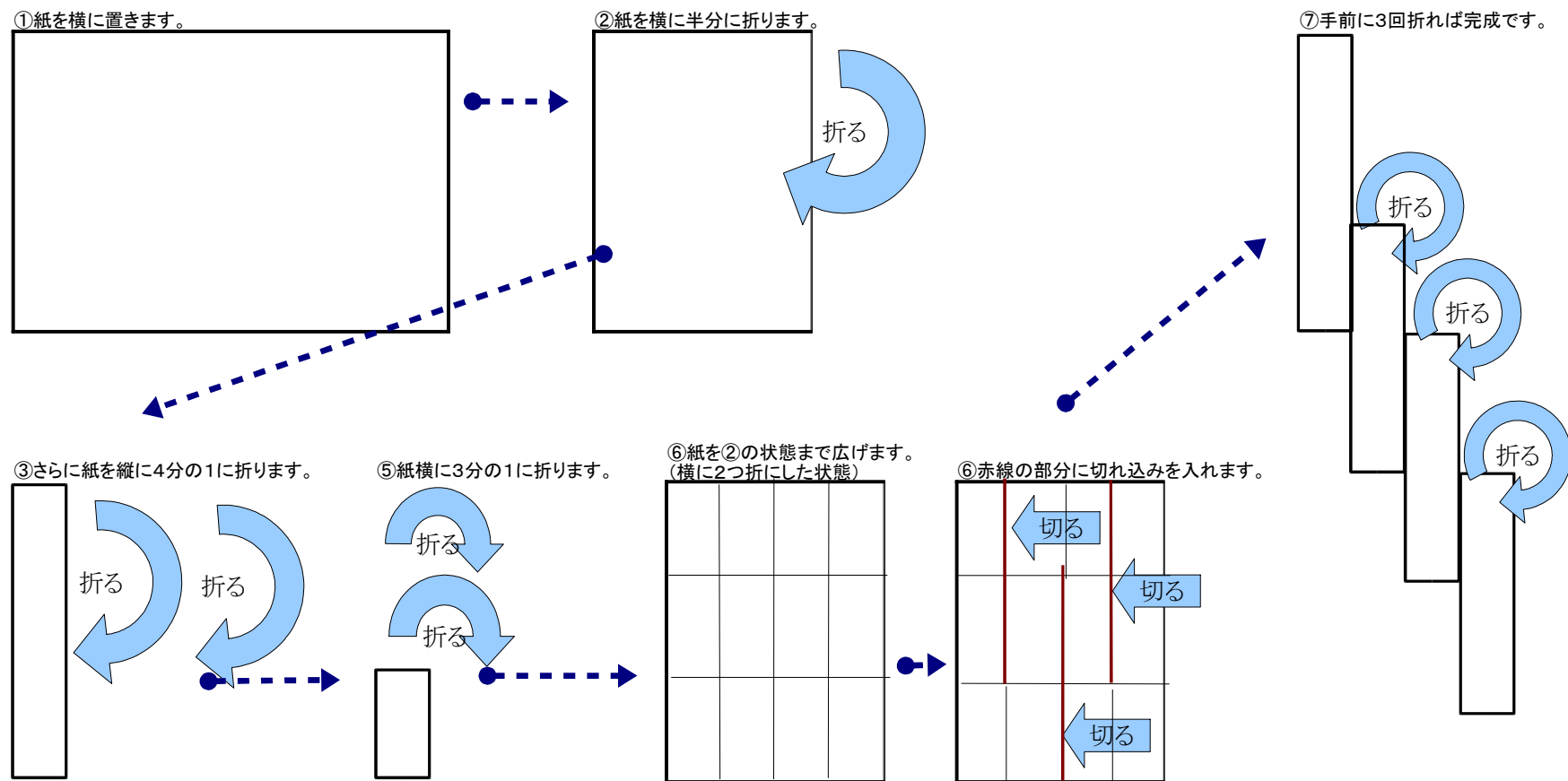
⑤紙を広げます。



⑥赤線の部分に切れ込みを入れます。



小さなサイズの紙垂(しで)の作り方



御幣

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

移動: ナビゲーション, 検索

社頭に立てられた御幣御幣(ごへい)とは、神道の祭祀で用いられる幣帛の一種で

2本の紙垂を竹または木の幣串に挟んだものである。

幣束(へいそく)、幣(ぬさ)ともいう。

通常、紙垂は白い紙で作るが、御幣にとりつける紙垂は白だけでなく五色の紙や、金箔・銀箔が用いられることもある。

かつて、神に布帛を奉る時には木に挟んで備えていたが、それが変化したのが今日の御幣である。
その由来から、元々は神に捧げるものであったが、後に、社殿の中に立てて神の依代あるいは神体として
あるいは祓串のように参拝者に対する祓具として用いるようになった。

古来から金属には魔力があると信じられ、金属製の貨幣は穢れを祓う目的にも用いられた。

富本銭には通貨説と厭勝銭説がそれぞれ対立しているが、六道銭にも見られるように
和同開珎、寛永通寶であれ、いずれの銭貨も厭勝銭として用いられることがあったことは確かである。
この貨幣の「幣」の字は御幣と同義である。

